

2018 年 3 月 24 日

TLP 中国語 2018 年度台湾研修 日誌

2018 年 3 月 11 日より 3 月 18 日まで、計 8 日間にわたり「TLP 中国語 2018 年度台湾研修」を実施した。本稿は、研修に参加した学生による日誌を時系列順にしたがって整理したものである。研修第 1 日目から第 4 日目まで、さらに第 7 日目の訪問先には全員が出席したため学生の中の代表者が日誌を記録した。第 5 日目と第 6 日目は学生の個別の関心にしたがってグループに分かれて研修を実施した。なお、研修 8 日目は早朝に台湾松山空港を出発する便で帰国したため、日誌の記載はない。

台湾研修に参加した学生は五十音順で以下の計 12 名である。

青木風香、大島一武輝、黒田実玖、小林新九郎、大門かおり、高木美咲、富澤郁美、永田真衣子、西田尚、平松昂、村永宙也、李子卿。

引率として教員の阿古(城山)智子、大学院生の福永玄弥が参加した。

2018年3月11日 台湾研修1日目（全員参加）

拉勞蘭小米工坊

富澤 郁美

拉勞蘭小米工坊では主に戴明雄さんのお話を伺った。

(1) 拉勞蘭小米工坊について

元来台湾の原住民の方々は粟を栽培していたが、日本統治などの影響で米に圧迫される形で粟の栽培量は減ってきていた。しかし、近年原住民族の文化の復活の一部として、粟の栽培が復活しつつある。さらに、粟の健康効果に注目されたこともあり、この4年間で価格が3倍ほどに値上がりしている。拉勞蘭小米工坊では、粟や紅藜の販売を行っており、原住民族の文化を広めると同時にビジネスとしても成立している。以前は若い人が職を求めてどんどん外へ出て行っていたが、今では一度就職したのち戻ってくる人などもおり、村の若返りにも貢献している。

(2) 香蘭社區發展協會について

ここでは職員が村のお年寄りの相談に乗り、生活のアドバイスをする場となっている。お年寄りにとって頼れる場所であると同時に、職員を雇うことで雇用を生み出している。さらに、同じ敷地内に粟栽培の歴史を説明する資料館もある。

(3) 頭目的家について

パイワン族の頭目は、頭目の一家の第一子が引き継ぐ。さらにその斜め向かい側にはかつてアミ族の頭目の家があった。これは、日本統治時代に狩人であるパイワン族を山側、漁師であるアミ族を海側に移住させた日本政府が、村の中で揉め事が起きた時に両頭目が話し合いで解決できるようにしたためである。

(4) 新香蘭教會について

建物自体は自分たちで立てており、扉は台風などで流れてきた木材を利用している。さらに扉脇には薄い石を積み上げる手法を用いており、伝統を融合している。

教会内では、原住民に関して、核廃棄物処理問題についての講演を聞いた。

400年前までの台湾には原住民族しかいなかった。そこから、漢民族が移住し、原住民族は少しずつ追いやられていった。実は台湾の原住民族は南洋民族のルーツでもあり、言語も似ていることが多いそう。しかし、今となって認定されている台湾の原住民族は16であり、言語も消失している民族が後を絶たない。そもそも台湾の原住民族の言語において文字は存在せず、タトゥーや刺繍表現にとどまっていた。そのため、カタカナやローマ拼音での発音の保存が試みられている。教会では、こうした表現を用い

て聖書や賛美歌を中国語と自分の民族の言語で記録しており、言語の保存において重要な役割を果たしている。言語だけでなく、教会は強い団結力と困った信者に対する導きを通して、原住民の社会運動の参加を促していた。ただ、西から輸入された宗教により文化が破壊されていたことも忘れてはならない。台湾政府が原住民族の文化保存に積極的になったのは 2000 年前後のことである。そこから原住民族の言語によるラジオ放送が開始したり、民族学校においてそういった言語を用いた教育がなされたりするようになった。もちろん法律の整備も大事であるが、原住民がいかに自分たちの問題を自覚し、危機感を持って解決に向かえるかも大事である。自覚を持った行動により、言語や文化だけでなく考え方も守れるからだ。

台湾の原住民族には「頭目」というリーダーが存在している。そのため、1 つの国家として成立している、という考え方もある。国家として捉えることで、より強いアイデンティティや意識を持てるようになり、働きかけもより力強くなるのではないか。さらに、国家と捉えると民族が住む土地も民族のものとなり、伝統的に管理されていた通りの土地活用が可能となる。

蘭嶼では、政府が原住民族を丸め込む形で核廃棄物処理場を作った。半ば原住民族を騙す形で建設され、契約期間を大幅に過ぎた今でも使われ続けている。ただし、この核廃棄物処理場の問題に原住民族自身が運動を起こしたことで、他民族とも協力し、自分の民族を見直すきっかけにはなった。

さらに、アミ族は美麗ホテル建設を法律違反として訴訟を起こし、勝訴している。ただし、一度建てられてしまった建物をどうするのか、まだ議論の余地がある。破壊された自然などは戻ることはなく、取り返しはつかないのである。

(5) 戴明雄さんのご両親

日本統治時代を実際に生きていた方。お父様は 90 歳になったそうだが、流暢な日本語で挨拶して下さった。親日家が多い台湾ではあるが、慕ってくれる方々に恥じぬような日本でありたいと思った。

(6) 戴明雄さんの弟さん

お話しして下さった建物は、ご自分で建てられたらしく、周りがコンクリートの家が多い中、暖かい木の家だった。女の人のための部屋、男の人のための部屋があるそうで、今回入った女の人の部屋には様々な女の人の彫刻があった。女の方は子供を産めるから男性よりも強く、さらに子供にも慕われる、と持論を語ってくれた。

作家でもあり、世界各国を回っているそうだ。しかし、気が向いた時には狩をしにしばらく山にこもる、そんな生活が好きなそうだ。

狩人らしく、理想の教育を山で駆け回っているような遊びをすることと語って下さった。血や虫を怖がるのではダメ。強く生きることで自分の子供たちも強くなれる。様々な経験談を伺ったが、どれも衝撃的で面白かった。

緑島、人権文化園區

永田真衣子、小林新九郎

今日は緑島の人権文化園區に行きました。人権文化園區は大きく3つの区域に分かれており、一つ目は緑州山荘を見学しました。人権文化園區は大きく2つの時代に分けられ、1951年から1960年までは思想や労働の強要が行われており、新生訓導処で約2000人が収容されていました。一方で、1972年から1997年までは政治犯を収容する監獄として約400人の人々が収容されていました。緑州山荘は後期の政治犯の収容に使用されていた建物で、収容所と軽く運動のできる広場、授業を行う場所や医務室、家族との面会室などから成り立っていました。

もともとの施設の始まりは日本の統治時代に強制労働を行わせるための施設がつくられたことにあり、日本とも深い関わりを持っています。第二次世界大戦の国民党と共産党の対立によって台湾は共産党に対抗するための本拠地として厳しく統制が行われ、戒厳令が敷かれました。この戒厳令のもとでは報道や出国、集会、結社の自由はなく、人を密告することで報酬が貰えたり、通報しないことは逆に犯罪となりました。ここで捉えられた政治犯などが緑州山荘に収容されていました。一部屋には13人ほどが収容され、便器と浴槽が一緒になっていたり、夏は50度もの高温になるなど劣悪な環境に置かれていたようです。離れた医務室の建物には体の不自由な人や病気の人が隔離されていました。さらにその奥には精神的病気になってしまった人や罰を与えるために個室に監禁された人が収容される場所がありました。後者の部屋では光が入らない上一切の音も聞こえないため、罰としては非常に苦しいものであったようです。

この施設は国際的な圧力のもと民主化が進んだことで政治犯も解放されて閉ざされましたが、戒厳令が解かれ刑法が改正されるまで40年強の年月使われていました。しかし、この歴史はあまり伝えられることがなく、後世に伝えていくためにこのような展示が非常に大切なものであるとガイドさんはおっしゃっていました。

二つ目に訪れた場所では、人権文化園區全体の模型の展示が見られ、政治犯自らつくった石垣や山から水をひいてつくられた入浴場、女性がパフォーマンスを行うステージなど様々な場所の紹介を受けました。また、政治犯と緑島の人々の関わりもおもしろく、政治犯は知識水準が高かったため現地の人々には尊敬されていました。医者として現地の医療の向上に努めたり、現地の子供や役人の子供の教育を行ったりしていました。

3つ目は新生訓導処に関する資料が多く置かれた場所で、はじめは収監されていた政治犯によってつくられた芸術品や創作物が飾ってありました。それぞれのものにエピソードがあり、バイオリンや、バレーボールで作られた地球儀など政治犯の思いが込められたものが多く展示されていました。また彼ら

が過ごした青春時代のお話では理不尽にも死刑になってしまった政治犯や子供を育てながら生き抜いた政治犯など今の自由な台湾の基礎をつくったともいえる人々のお話を聞くことができました。

どのガイドさんもおっしゃっていたのはこの歴史を忘れてはいけないということです。台湾の現代の社会が、この時代があってこそ存在するということを強く教えていただきました。

緑島・台東

平松 昂

今日は午前中に緑島を一周して、地元の人たちに馴染み深い場所・島外から来た観光客に人気の場所を訪れ、昼食をとったのち、フェリーで台東へ戻り、夕方は台東の海浜公園でサイクリングをした。

まず、緑島で訪れたスポットをいくつか順に紹介する。最初に見たのは緑島灯台で、これは日本統治時代から使われ続けている灯台らしい。1917年にアメリカの船が転覆した際に救ったという話を聞いた。次に、観音洞を訪れた。緑島には217年前に初めて漢民族が入ったそうで、それまではフィリピン系の住民が多く住んでいた。漢民族が緑島に移住して来た際に、山の中に光を見つけ、その光のあった洞穴に観音菩薩像をおいたそうだ。今でも緑島の人々の信仰の中心として親しまれている。また、道中には緑島の絶景を見ることができた。開発されておらず、電線すら走っていない岩場の海岸は、もともとは台湾軍が使用していた軍事訓練所の跡地だそうだ。また、海參坪付近には、多くの奇形岩があった。寝ている女の人と犬のような岩や、孔子の形(孔子の写真は存在しないので確かめられないが)をしているという岩も存在した。個人的には、宮崎県にある鬼の洗濯岩や、前回2012年に家族で台湾を訪問した際に見た女王頭(野柳自然公園)、オーストラリアで見た twelve apostlesなどを思い返し、どうしてこのような形の岩ができるのか、そしてそれぞれの岩が地域に人々にとって、なんらかの経緯を経てある種の象徴的な意味を持っていることを考えさせられた。特に、緑島は標高の低い地域に人が多くすみ、山は崖のように急斜面であることから、度々台風などで村が浸水するので、海に対する畏怖の念が強かったのではないだろうか。実際、台風で2年前に浸水した村では、多くの家が新築され、木が枯れているのがはっきりとわかった。そのあと訪れた紫坪には、珍しい動植物が多く見られた。中でも岩にくっついて、満潮時には海に沈む草はとても興味深かった(両生類的な能力を持っているのだろうか)。ただし、その石の上の草は盆栽にできるので、盗まれることも多いという。バスの運転手の話聞き、盆栽はその美しさで多くの人々を魅了するが、人工的に切り出した自然に過ぎない、と感じさせられた。

昼食は緑島の中心市街地でいただいた。刺身などの海鮮料理が多く、どれも非常に美味しかった。グアバのジュースを初めて飲んだが、濃厚な甘みに強く惹かれた。

午後の台東まで戻るフェリーは大幅に遅れた。そのため、史前博物館の見学の予定は翌14日午前延期となり、夕方は森林公園をサイクリングすることとなった。この公園は、海岸沿いに立地している静かな公園で、多くの台東市民・観光客の姿が見られた。この公園の特色は、非常に綺麗でゴミがほとんど落ちていないこと、自然が残されていて鳥などが多く見られることにある。その背景としては、入場料を取っていること、公園内に売店や食堂・自動販売機が存在しないこと、などが挙げられるのではないだろうか。日本の公園は、利用者ファースト的な視点に立つことが多いためか、自然と人との調和

の点でこのような公園に届いていない部分があるように思われる。

夕食は、台東市郊外の植物園に併設されたレストランで、鍋を食した。最近日本でも人気の健康系(オーガニックなど)レストランだが、何よりの特徴は普段食べることのできない新鮮な野菜を食べることができる点にあるだろう。鍋として食べたのち、僕はタロイモをほぐした鍋の中に肉と葉物野菜、ご飯と生卵を入れて混ぜ、水分を飛ばして作った「おじや」が美味しかった。(台湾の人々がこのようにして食べることがあるのか、マナー的に大丈夫なのかは少し疑問だが)

2018年3月14日 台湾研修4日目（全員参加）

国立台湾史前文化博物館

李 子卿

今日の午前は昨日船の時間が押して行くことができなかった国立台湾史前文化博物館に行きました。この博物館では1980年に台東に鉄道駅を作った時に出土した遺跡を中心に台湾の有史以前についての展示を行っていました。遺跡の中には墓がとてまたくさんあり、その墓からは様々な装身具が発見されたようです。中でも人獣形玉玦は特に有名で、この史前博物館のシンボルにもなっています。人獣形玉玦は二人の人と一匹の獣をかたどった長さ約7センチ、重さ約17グラムのイヤリングで、比較的重いため当時の人々の耳はその重みで長く垂れていたと考えられています。興味深いことに似たようなデザインのイヤリングが台湾各地、そしてフィリピンなどでも発見されています。これは当時に貿易が盛んに行われていたことを示唆しています。アニメーションで海路を用いた貿易の様子を紹介していただきました。石器時代にすでに遠隔地と装飾品の物々交換をするほど生活に余裕があったことに驚きました。

最も興味深かった話としては、石や玉に穴を開けた方法が未だにわかっていないという話が挙げられます。鏃には木の柄とくくりつけるための穴があり、玉環と呼ばれる装身具は細長く中空になっているのですが、これらの穴がとてまたきれいなのです。当時は鉄もなく、きれいな穴を開けるのに十分な硬度を持った道具がまだ発見されておらずまだ研究中とのことでした。それらしい道具が出土していないということは長い年月が経つと変質してしまうものか、一見そう見えないようなものかが使われていたのだろうと考えました。人の歯はすごく硬いので、人間の歯を使って加工していたのかななどという素人考えに至ったりしてなんだか楽しくなってくるような時間でした。有史以前はわかっていないことが多く、様々な想像ができるのでとてまた好きです。

この史前博物館は集客のため、通常の博物館がやっているような普通の展示に加えてコンピューターを使ったユニークなコーナーが多々ありました。前述したアニメーションを使った解説（登場キャラのデザインがポップ！）を始めとして、当時の人々の生活の様子を描いた動画に自身の顔をはめこんで当時の人々になったかのような体験ができるコーナーや、土器を自由にデザインして焼けるコーナーや、顔に入墨を合成して当時の織物が上手い人になった気分になれるコーナーなどがありました。他の博物館ではなかなか見ることの出来ないものばかりでとてまた楽しめました。このような工夫は客寄せには非常に効果だと考えられるので、他の博物館も参考にすべきだと思います。また、博物館内で僕らを案内してくださったガイドさんがとてまた日本語が上手だったのですが、その日本語がなかなかかわいくて終始楽しみながら見学ができました。

2018年3月15日 台湾研修5日目（全員参加）

景美人権文化園區を訪問して

大門 かおり

政治犯として実際に10年の刑に処せられていた蔡さんの案内で景美人権文化園區を訪問した。蔡さんは10年もの間緑島などで苦難に遭われたとは思えないほど明るく、1930年生まれの87歳とは思えないほどお元気で、本当に日本語がお上手でいらしゃった。蔡さんはまず、基本知識として白色テロの歴史についてお話くださった。台湾では1949年から1987年まで38年間もの間戒厳令がひかれていた。その下で政治犯とされた人々は軍法によって裁かれ、市民の逮捕・投獄が横行した。87年に戒厳令が廃止された後も、92年に刑法100条が修正され、思想・良心の自由などが認められるまで白色テロは続いた。蔡さんによれば、1945年8月の終戦後、蒋介石の軍隊が当初やって来た時台湾人は、心からの誠意を持って歓迎したそうだ。「日本が戦争に負けて、祖国の軍隊が戻って来た。これからは自分達も、もう植民地の人間ではなく、一国の国民になるのだ。」、と。ところが実際見たのは、汚らしく、だらしの無い格好の、今まで見てきていた日本の軍隊とは、天と地ほど違った兵隊達だった。蒋介石の軍隊は、疲弊し切っていた上に、数合わせのために臨時に集めた者や、道端で拉致してきた者も入っていた。そのため、例えば、台湾に来て蛇口から水が出るのを見て驚き、水道の蛇口だけを買ってきて壁につけ「水が出ないじゃないか」と怒ったり、夜になって電燈が着くのが珍しく、電球を買って来て天井からぶら下げたが、夜になっても点かず、「これは一体どうしたのか」と怒ったりというほどであった。そればかりでなく、略奪、婦女暴行等も次々に起こったため、台湾人が反感をもつのに時間はかからず、遂には衝突し、二・二八事件では台湾の人々が大量殺戮された。しかし、事はそれでは済まず、次には、台湾の弁護士や医師、大学教授など主にリーダー級の人たちが、ありもしない難癖をつけられて投獄、監禁、虐殺された。それらは、「台湾に潜入している共産党員を撲滅する」という名目で行われた。蔡さん自身も高校卒業後先生に言われて「読書会」に参加し、それに共産党が関与していたことを理由として1950年に逮捕され、緑島などで10年もの苦難の日々を過ごすことになった。共産主義とは何かなど、知る由もなかったのにだ。捕らえられた人々の収容所は景美人権博物館以外にもあり、建物が足りなかったため寺や倉庫を改造し



収容された。模型の写真を見て分かつたり、かなり過密な状態で全員が横になって寝ることもできなかったそうだ。

部屋は窓がなかったため風通しが悪く、気候も高温多湿であるため夏には蒸し風呂になった。扇風機代わりにブランケットを真ん中に吊るして人が交代で両側から紐で引っ張り、風を生み出し、なんとかしのいでいたそうだ。そんな状況下でも皆、毎日午前4時半頃に目を覚ましていた。なぜなら早朝鉄門が開くと点呼が始まり、名前を呼ばれた収容者は連行され、銃殺されるからだ。蔡さんにとって、誰が呼ばれるかわからず、いつ自分の名前が呼ばれるかもわからない点呼は、一番の恐怖だった。刑場に送られる前の生前最後の写真と、銃殺後の写真は合わせて蒋介石の元へ送られたが、生前最後の写真では皆、首に札をかけられた姿でほほえんでいる。私なら、死刑を目前に控え怯えているか、後に残される家族のことを考え泣いているだろう。しかし、収容者の方々は「こんなやつら（国民党）には負けないぞ」という強い意志を持っており、当時の政府に気持ちの面は負けていなかった。収容された時から死を覚悟して、真っ赤な血を染み込ませるために家族から白シャツを差し入れてもらった人までいたそうだ。この話を聞いて、人として扱われず、宿舎に向かう際には大きな扉ではなく小さなくぐり戸を手錠、足枷をはめたまま通らせられても消えることのない、台湾人の気高さ、気概、強さを感じた。台湾の人々には、どのような状況下に置かれても決して屈することのない、強靱な精神を持っていた先人たちを誇りに思い、その存在を決して忘れないでいてほしい。



くぐり戸のついた扉の前に立つ蔡焜霖さん

二二八記念館

永田 真衣子

二二八事件について

二二八記念館では、二二八記念基金会の理事の方や景美人権園区のガイドをしていただいたさいさん、二二八を考える会の理事長の方、3人にお話を伺いました。。二二八事件が起こった後、陳儀は台湾のエリートと交渉をしながらも秘密裏に蒋介石に部隊の派遣を頼んでおり、その上陸後は無差別虐殺が行われました。虐殺は大変残酷なもので、針金で手に穴をあけるなどの行為が行われました。シュウさんの家族も犠牲者で、祖父は国民党の手から逃れることはできましたが父親は国民党によって死刑となりました。二二八事件では約3万人もの犠牲者が出て、特にエリート層が狙われました。その他にも医者や高校教師も被害者に含まれていたそうです。

質問コーナー

ここからは学生が質問を行い、それに答えてもらいました。

(1) 国民党は中国本土の共産党に対抗するためにどのような思想を用いたのか？

国民党に反対するものは全て共産党勢力と決めつけて徹底的に取り締まりを行なった。国民党の思想の根本は孫文の唱えた三民主義であったが、実際はほとんど行われていなかった。

(2) 日本でも原爆の被害者からの話を聞いてそれを若い世代がボランティアとして伝えるということが行われているが、台湾での二二八事件や白色テロに対する若い世代の中での歴史認識はどうか？若い世代にしてもらいたいことはあるか？

二二八事件のタブーは40年続き、その間はこの事件に関して話すことは許されていなかった。1987年になってようやく事件のタブーを破り、平和の日にしようという運動が起こり、1990年代になって話ができるようになった。去年には国会で行令が採択され、独裁時代を象徴するものを取り除こうという動きや不義の遺跡を残そうというムーブメントが起こっている。博物館を作ったり実際の体験を話したりというように人権教育の仕事を行うことで後世に過去の出来事を知ってもらいたい。語る側の人間も二二八事件の遺族しかもうおらず、そして白色テロの時代の被害者も少なくなっている。そのため、これからは若者に自分たちが話したことを伝えていってほしいし、台湾という国全体がそのようなことが起こらないような国にしていきたいとおっしゃっていました。

(3) 外省人と内省人の対立はあるのか？

あまり対立はなく、それは国民党が作り出したものにすぎない。現代では区別も曖昧になってきてい

るし、退役軍人の方も違う角度から見れば被害者である。

(4)加害者として求める保障

国会での補償はある。二二八事件や白色テロについての補償金が出るという紙を渡されたが、補償というものは賠償とは異なり、国家はまだ自分のものが過ちとは認めていない。そのため、補償ではなくて賠償にし、自分の非を認めて真の反省がほしい

(5)加害者側の証言が不足しているという点についてはどのように解決していくべきか？

誰が責任を持つべきかが明らかにされていない。解決策としては国民党の文書の公開を求めているが、それは政党のもとして隠されているため公開が求められている。しかし、加害者の声がないことは大きな問題である。

(6)中国政府の共産党と台湾政府の関係についてはどう考えるか？

中国の政府と国民党は手を組んで台湾を飲み込もうとしているが、東アジアの均衡を崩さないためにも、台湾の政府は現状維持（台湾人民主権）に努めることが重要だ。

(7)日本の統治時代と二二八事件や白色テロには関連性はあるのか？

日本の植民地統治は下水道の整備や教育の普及などポジティブな面が多かった。日本の統治時代に近代化が図られたことで、前近代的な国民性を持つ中国とはあいそれなかったという点では関係があったのかもしれない。

最後にお礼をして記念写真を撮りました。大変貴重な話を聞くことができて良かったです。

緑色公民行動連盟

村松 宙也

本日3月15日の午後、台湾の原発に関して学ぶために緑色公民行動連盟の洪先生にお話を伺いました。緑色公民行動連盟は台湾の反原発 NGO 組織で、若い方などからなるスタッフが6、7名いらっしゃるということです。1992年に活動を開始した組織で、活動内容としては核政策のモニタリングや評価、一般に向けた教育や宣伝、加えて各種データ分析が主な物となっています。ここで重要なポイントは、生活に密着した活動を行うよりも、政策重視の活動を行うという点です。活動内容のお話を聞いた後、質疑応答セッションに入りました。今回私たちがお聞きしたこととその返答は以下の通りです。

Q. 「2017年に採択された原発廃止法案は、2025年までに原発を廃止するというものですが、あなた方はそれをどのように評価していて、今後どう進むとお考えですか？」

A. 背景事情として、以前から反原発運動はあったものの、福島第一原発事故以降は特に、台湾の地震の多さや国土の狭さなどの日本と似た状況も相まって、反原発運動が一層活発になった。今回の法案だが、2025年に原子炉が40年間運用されたことになるから、それ以上運転期間を延長しないで廃炉にしようという施策である。2025年に廃止するまで7、8年あるが、ただ原発を止めるだけではなく、再生可能エネルギーやLNGなどの代替エネルギーをどう導入するかも考えねばならない。火力もゆくゆくは減らしたい。これは簡単では無いので、社会の理解と協力も必要。余談だが、日台のNGOを比較すると、台湾の方は自分たちが政策を変えられると信じているので政策的に働きかけて行くが、日本の方は自分たちが政治を変えられるとまでは思っていないように思える。

Q. 「どうして、どのようにして台湾人の間に原発に対する危機意識が高まったのですか？」

A. 繰り返しになるが、2011年の事故の影響は大きかった。核エネルギーは特殊なエネルギーである。とてつもない力を核エネルギーを持っているので、一回事故が起こるとものすごく大変なことになってしまう。その可能性を抑えるために管理体制をしっかりとすることに資源を投入するのは否定はしない。しかしマニュアルをしっかりとしてもそれに対応しきれないことが起こりうる。そうなるともう事態を制御できない。人間のミスは絶対に防げない。「進んでいる」日本ですらミスが起きてしまったのだから、台湾人はますます自信を失った。

Q. 3,11以降、台湾人はすぐに反原発の反応を示しましたか？それとも少し時間をおいてその反応が起こったのですか？

A. 勿論事故後は台湾社会にも衝撃が走ったが、政策的な次元の話がなされるようになったのは少し時間を置いてからであった。事故後はメディアでも大きく取り上げられたので、一般の人々の原発に対する危機意識は確かにたかまった。

Q. 「日台と違い、地震の少ない国で原発を導入している国があるが、そういった国の原発政策に対してはどのような意見をお持ちですか？」

A. 一つの国が原発を推進するには様々な要因がある。フランスは核物質処理などの原子力産業全体が国によって推進されていた。台湾では日本などから原発を輸入していた。中国では工業の急拡大のためどうしてもエネルギーが欲しいようだ。一般的に、核が必要とされるされるときは、①エネルギー・経済②戦争の2つがある。我々としては2つとも支持できない。核エネルギーは巨大なエネルギーを生み出すが、本当に必要か？ どんどん生産することが幸せなのか疑わしい。産業革命後の産業やエネルギーの発展は悪い面もあることを知って欲しい。因みにだが、核エネルギーは無責任なエネルギーである。40年前、技術者は誰も核廃棄物の問題を考えていなかった。当時のエンジニア達は楽観的すぎた。科学楽観主義について反省すべきである。技術は専門的にオッケーか否かだけでなく、倫理も考えるべきだ。

Q. 「台湾の方々は原発なきあとの世界についてどのようなビジョンを持っていますか？」

A. 台湾では原発は12、3%あり、これから0になって行くであろうが、生活が崩壊するとは思っていない。

Q. 「国によって原発の依存度・重要度は変わってくると思うのですが、そういった違いはどのように影響してくると思いますか？」

A. 例えば独仏を比較すると原発に関する選択の差が大きい。これは「経済や文化の違いが根底にある。フランスは、産業自体を変えないと脱原発ができない。中国は工業の拡大で必要性があるのだが、少なくとも安全体制は必要。独立した組織がチェックできるようにせねばならないはずだが、いまの中国にはそれはできていない。

Q. 「原発がなくなった後はどういった活動や目標を持ちますか？」

A. それはまだ考えていない。

Q. 「2025年に廃止するというが今までの動きなどからそれが実際にできると思いますか？」

A. 厳しいこともあるけど努力していき、乗り越えて行けばいい。やるべきことならやり続けられればいいのだ。

また洪先生は、福島の問題については、汚染地域などの安全の確保とともに元の場所に戻って生活の

再建をすることが同時に課題であるが、表面的な復興を「見せる」ことに終始しているのではないかという不安が被災者の間であること、台湾の若者の方々は、今の国の体制によって幸せにさせてもらえていないからアクションをすぐに起こしやすいこと、またただ反対するのではなく、いかに次に進んで未来をよりよくするかが大切だということを仰っていました。

本日は、台湾の方々がどのように原発に対する考えを持っていて、どうしてそのような考えを持つにいたったのか、また台湾に限らず様々な国の原発事情についての見解をお聞きすることができ、非常に勉強になりました。今後、台湾が具体的にどうやって原発をなくすことと、エネルギー安全保障を確立して行くのか、中止し、私としても当事者意識を持って考えていきたいと思いました。

迪化街と URS

大島 一武輝

3月15日午後、迪化街を訪れた。迪化街は昔から栄えた商店街のような場所である(図1)。しかし近年、地価の高騰などにより街が衰退していた。この状況を打開するため、政府が建築物を買収し、URS(Urban Regeneration Station)として民間人に貸し出した。全てのURSは番地によって識別され、迪化街には5箇所程度存在する。今回はURS329(図3)とURS155を訪れた。URS329はかつて迪化街に多く存在した米問屋の歴史を伝えるために、米を使用した料理を提供するカフェと展示を行っている。URS155は迪化街の伝統的な味や匂いを体験できるショップを展開している。両者の店主に話を伺うことができたが、両者とも共通していたのは「街の復興のため」という点である。地元の“味”を後世に伝えていくため、各々が独自の形でURSを運営していた。

URS329では店主の葉守倫さんから店そのもののだけでなく、迪化街の地方創生の概観も教えていただいた。政府は容積移転政策を実施し(図3)、77棟の建造物の経済面を保証した上で、先ほど述べたURSを数カ所配置した。葉さんは迪化街を人体と見立てた時、URSはお灸のような存在だとおっしゃっていたのが印象的だった。実際、URSが設置された後の建築物の使用率は上昇している(図4)。

これは現地に足を運んで初めてわかったことなのだが、URSの他にも「街屋」と呼ばれる仲介業者が各建造物の個人オーナーと小規模スタートアップの間をとりもち、効率的な空間活用を促進しているそう。九份のように観光地化せず、伝統を守り続けられるようにビジョンを統一するためのミーティングを積極的に行なっている。今回のフィールドワークで迪化街特有の、官民共同の地方創生の様子を学ぶことができた。

图 1



图 2



图 3

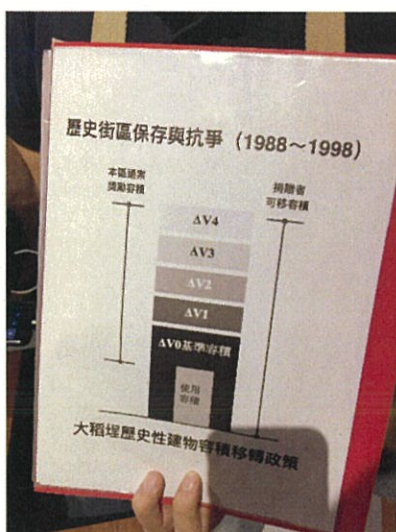


图 4



阿嬤家(平和と女性人権館)を訪れて

大門 かおり

慰安婦記念館に行くということで、私は大変緊張していた。日本の負の歴史をさらに知ることに対し身構えるとともに、日本軍が戦時中に管理した慰安所で慰安婦となった台湾人慰安婦について説明する記念館だと聞いていたので、厳格な雰囲気博物館を想像していたからだ。ところが到着してみると、観光客にも親しまれている迪化街の一角にこじんまりと存在するおしゃれなカフェだった。阿嬤家、すなわちおばあちゃんの家は百年近い歴史を持っており、手前と奥の2軒の連棟式長屋の一部を廊下でつないだ細長い造りになっている。一階の「AMA CAFE」は、フェアトレードのコーヒーやチャリティグッズなどを販売したり、イベントなども行う空間。店を抜けて奥の棟に入ると展示室があり、一階では慰安婦制度や、台湾人慰安婦がどのように戦地に連れていかれたのか、慰安所での模様などを写真やパネルを使って解説している。二階の「女力空間」では常設の展示が見られるほか、人権を学ぶ教室や、図書館としての機能も備えている。また、廊下では「蘆葦の歌」というかつて慰安婦だった阿嬤たちの写真展が開催されている。過去の戦争を力強く生き抜いた女性達の、その後の人生をたくましく生きる姿を垣間見ることができた。

かつて慰安婦だったと名乗り出た台湾人女性は59人で、それぞれが慰安婦になった経緯、陥った境遇がディスプレイで説明されていた。日本人仲介業者や警察官にだまされたといったという説明が多くある一方、台湾人仲介業者にだまされたという説明も同じくらい目に付いた。

日本軍による強制連行の有無は、慰安婦問題における大きな争点であり続けてきた。この問題に対する阿嬤家のスタンスは、『慰安婦』は強制だったか否かという議論があるが、どちらであったとしても、実態は性的な暴力であったという事実には変わりはない」というものだ。それゆえ、阿嬤家では第一次世界大戦以降今までに世界で起こった性暴力に関する展示とともに、慰安婦問題を相対化して見つめ直すことができる。すなわち、強制連行の有無を問題にするのではなく、当時の日本軍による慰安所管理を「軍事性奴隷制度」と定義し、それを戦時下の犯罪として問いたただすのである。

阿嬤家は、歴史を忘れず、現代女性の権利の向上を呼びかけ続けている。というのも、阿嬤家は2016年12月クラウドファンディングなどによる支援のもと生まれた、台湾で初めて女性の人権問題などをテーマとするミュージアムだからだ。国際女性デーに正式に開館し、元慰安婦の人権運動から女性全体の人権を引き続き求めていく姿勢を示している。婦女救援基金会では、併設されているAMA CAFEを通して女性の起業や就労の機会を提供している。起業を目指してはいるものの、販売ルートを持たない女性たちに優れた宣伝プラットフォームを提供しているという。

その中で、観覧者による寄せ書きメッセージに若干違和感を覚えた。展示内容は憎悪や嫌悪を煽るものではないにもかかわらず、「恥を知れ!」「最低な国だ!」など、日本を糾弾するフレーズが多く並んで

いたからだ。

旧日本軍の慰安婦という言葉は、かなり否定的な響きを持つようになってしまった。若い頃に時代に翻弄されて大変辛い思いをされたおばあちゃんたちという事実よりも、反日運動のシンボルとしてのイメージが、多くの日本人が元慰安婦に対し持つ印象ではないだろうか。事実を把握せずに、コストなく得られるネットの情報に左右されることもできてしまう日本人にこそ見てもらいたいと思った。

阿嬤家のもう一つの特徴は、「阿嬤たちの心の傷を癒やす」取り組みに関する展示の多さだ。運営団体が心の傷を癒やす取り組みに力を入れてきたことが展示からうかがえ、とても素敵な試みだと感じた。若い頃の夢を婦女救援基金が間に立って実現させる試みの例としては1日スチュワーデス、1日郵便局員などが紹介されていた。阿嬤達にとってスチュワーデスは自由、郵便局員は安定した職を意味した。そうした活動によって阿嬤達の心の傷を癒やし、人間としての尊厳を取り戻してもらうのである。



阿嬤たちは戦後、夫に慰安婦として働かされていたことを伝えられなかったり、周囲から『けがらわしい』『恥』などと言われて、自分もそう考えるようになってしまっていた。彼女達は被害者であるにもかかわらずだ。これ以上同じ思いをする人を生まないように私たちは歴史を語り継いで、そこから学び、人権が尊重され、平等で、暴力のない未来を実現しなければならない。